

「今年度の取組で明らかになりつつある課題」及び「これからの対応方向」について

項目	今年度の取組で明らかになりつつある課題	これからの対応方向
イメージの払拭	「食品残さ」という言葉に対して、各人のイメージが大きく異なるケースがあったり、食品残さの飼料利用を古くからある「残飯養豚」とオーバーラップさせる人が多いのではないかと。今後は、ネーミングの工夫も含めて、“残りもの”といったイメージを払拭していくことが必要。	消費者、食品関連事業者、畜産生産者をはじめとする関係者の、「食品残さ」から「食品循環資源」への、「残飯養豚」から「循環畜産」への一層の意識改革を推進するため、17年度に整備した推進体制を母体に、関係者の理解の醸成を図る取組を継続的に実施。
安全性の確保	エコフィードの普及・定着を図るには、そのユーザーである飼料メーカー、畜産生産者が安心して利用できるよう、その安全性が確保されることが必要。	最終ユーザーである飼料メーカーや畜産生産者が安心してエコフィードを活用できるような環境を整備するため、食品循環資源の収集、運搬、加工及び飼料利用各段階におけるハザード及び遵守事項を整理するとともに、安全性を確保する仕組みを検討。
資源の発生実態の把握とその情報提供	食品リサイクル法の目標年度（18年度）を控え食品副産物を飼料用に仕向けたい食品関連事業者は多く、また、安価な飼料原料を利用したい飼料メーカー、畜産生産者は多いが、どこにどれくらいのエコフィード資源があるのかわからないため、資源の発生実態を把握する必要。	現状では廃棄されている又は肥料等に仕向けられているものの中で、品質面で飼料利用が可能な食品循環資源の実態を把握するため、全国的な食品循環資源の排出実態を調査するとともに、畜産生産者等に対して利用意向調査等を実施。
飼料化技術の普及	飼料化技術を確立するまでに多くの時間と費用がかかるため、安定的な飼料化技術の開発・普及が必要。さらに、発酵飼料化等に対する関係者の理解の醸成を図る必要。	安定的な飼料化技術の開発・普及、飼料としての栄養情報の広報のため、飼料化技術・栄養情報に関するこれまでの知見、データを収集・整理し、それらの情報をフィードバック。